# 高校低学年における基本的事項の理解について

樫本英彦　（英語科）

我が国における、英語学習において、従来からも各種の困難が見られた。それは外国語学習という、生得の思考法と異なった思考法や習慣を学習しなければならないことにまつわる困難である。

どのような国民も、学習する外国語が自国語と隔たっていれば隔たっているほど、その外国語の習得を困難に感ずる。オランダ人がドイツ語や英語を学習するのには、さほどの困難は感じないであろう。これは日本人でも方言を話す人が、標準語を習得する程度の努力に相当するかも知れない。

それに反し言語的に遠く隔たり、異質の言語を習得する場合は、大きな困難がともなう。その困難の第一の点は、新しい言語の全体の体系が把握しにくいことで、これは、一般に文法の理解という事で考えられている。

第二は単語と、その表わす意味と、その範囲の理解についての困難であり、また同時に、どのような単語を、どの程度使用したらよいのか、という事に関係する。この点で、日本人が第一に学習する英語は非常に困難な言語であって、英語は数種の言語（アングロ・サクソン語、スカンディナビア語、フランス語、ラテン語等）の複合言語の様相を呈しているので、単語の数が多く、単語の register（使用域）の指導がうまく行かないと、学習者は大変な混乱を来たし、学習に多くの無駄が費やされる。

しかし英語の辞書にのせられている単語の半数が外来語であるように、日本語の辞書の単語の半数も中国語（一般に漢語と言っているが、これは外国語である中国語である）である事、また、日本人のやまとことば、漢語の使いわけが、英語におけるアングロ・サクソン語の単語とフランス語系、ラテン語系の単語の使いわけと似ている点を考えると、日本人にはこの点は理解しやすい。

第三は、どのような国民においても、また、どのような学習段階においても見られる、自国語の干渉である。すなわち、外国語の構成、単語の使用、発音、一般的発想法において、無意識に自国語の影響が入って来る事である。

たとえば日本人にとって親戚という単語がa relative, relatives という風に単数と複数とに分析しなければならない事は説明に時間を要し、多くの生徒は無頓着にこれを使用してしまう、というのがその一例である。

これに関係し、一般に論理的、分析的思考に慣れていない日本人学習者にとって、論理的、分析的思考に基礎を置いている英語の理解と、習得は大変な困難と、年月を要することとなる。

例えば、動詞の時制、名詞の数、比較、人称と人称代名詞の使用、能動と受動の関係、話法等は日本語には、明確な形で表われていない（または別の体系で表現される）ために、学習者には、たえず大きな困難の感ぜられる事である。

中学校において、英語が週３時間になったという事は、今さらここで指摘するまでもなく、

わが国における英語教育に大きな困難をもたらしつつある。特に初歩の段階においては、日本語とはなはだしく異なる英語の構文や用い方を、繰り返し、実例と、練習により訓練しなければならない。その間に多くの誤りを犯しながらも、次第に訂正される事によって、正しい運用を理解し、駆使できるようになる。

このようにして初期の段階でしっかり定着されるべき過程を十分経る時間がないまま、不十分な理解、または誤解のままに中級に移行しなければならないのが現在の状況であって、これは学習者にとっても指導者にとっても大きな問題である。

**綴字、発音の指導について**

中級、初期において文字の書き方に関して十分に時間を割く事ができないため、間違った書き方をそのまま覚えている場合がある。また間違った書き順に慣れて、その結果、書いた文字が別の文字のように読める場合が出てくる。教師が板書する際にも、時たまこの事に関して、生徒の注意をうながし、また試験の際にも適当な指導をしたい。

自国語の干渉という現象は、発音に関して最も起りがちである。英語の音節を無視し、日本語の音節にもとづいて発音する。アクセントを最も付けやすい所に付けて発音し、本来のアクセントを無視する。綴字から発音を勝手に推測して発音しようとする。以上の事が、とかく起りがちである。

中学初期において、これらの英語発音のルールに関して十分な指導の時間がないため、単にlやthの特殊な発音の指導に止まっているためか、アクセントや音節の観念、特に母音に関して、不正確なままである点が目立つ。

現在テープやラジオ、テレビ等、発音習得の手段はいろいろあって、生徒はそれらに十分接する事はできる。しかし、基本的な発音の理解がないままにテープ等で発音を習得しようとすると、かえって、発音が不完全におちいる場合がある。

**文型の指導について**

文型による指導は初歩、中級の場合に有効であるが、初歩の場合に、特に次の点に理解の困難があるように思われる。

1．主要素と副要素の区別

本来の形容詞や、副詞は容易に理解して、副要素、すなわち、修飾語として識別することができる。しかし前置詞と名詞の結合した形容詞句、副詞句は、特に念入りに、かつ絶えず指導しないと、その本来の用法が分からないままに、文の構造の理解に困難をもたらす場合が多い。

これは、自動詞と他動詞の理解とも関係して、目的語と、前置詞プラス名詞の形をした副詞句の意義上の違いが理解できないためである。また同時に、自分の間違った読み方に影響されて、前置詞（接続詞にもこの傾向が見られる）を前の語に付けて読んでしまうためでもある。

従ってリーディングにおいて、正しい句切りと、意味に即したイントネーションで読む指導が大切であり、また特に複雑な文章では、修飾語をはっきりと副要素として意識して行くように指導する必要がある。

2．自動詞と、他動詞の区別

read のように、一つの動詞が自動詞にも他動詞にも用いられる事を適当な用例を用いて理解させる必要がある。

また、目的語をとるのが他動詞である、という概念を理解しても、その目的詞と、上述の前置詞プラス名詞との違いが十分に把握できない事がある。

たとえば、I read a book. という文に対し I read in my room. という文に接した場合、目的詞である a book と副詞的修飾語である in my room とが同じ位置にあるために、その異同が把握しにくい。しかしこれに対しては、前置詞プラス名詞が修飾語であるという観念をたえず明確に意識させる必要がある。

また一つの動詞が一定の用法しか持たないという間違った考え、また日本語の訳語から英語を考えるという傾向から He left Japan. He left for Japan. They talked over it. と They discussed it. He married her. などの理解や用法に困難が見られる。これらの用例を通じ、また、これらの用例の出るごとに自動詞、他動詞、目的語、修飾語の概念を説明、理解させる必要がある。

3．目的語と補語

He made her his secretary. と He made her a bookcase. の違いは、品詞の面から問題にする限り、なかなか理解し難い。しかし目的語＝補語、すなわち She is his secretary. という関係を理解させる事によって、把握は容易になってくる。

この場合、品詞と、文中における語の機能とをはっきり区別しないままに教えると、理解が困難になってくる。

また make の意味の理解として、どのような用法・意味においても「する」または「させる」と覚える生徒がいるが、これでは明確を欠いて不確実になってくる。例えば make A B「AをBにする」、make A do 「Aに～させる」とはっきり区別して習熟させる事が効果的である。

4．be 動詞

初歩の段階で多くの生徒が be 動詞を「は」と理解してしまう事がある。これが動詞の理解と全体の構文を不必要に混乱させる原因となる場合がある。また、後々の複雑な動詞の構成においてもとかく不必要に be 動詞を使用する傾向が出て来る。

**述語動詞の構成について**

生徒にとって、述語動詞をはじめ、準動詞の構成は大変困難なものの一つである。動詞に現在、過去、過去分詞、現在分詞、動名詞といった変化形があるが、これらがどのような意義を持ち、どのような使われ方をするのかが、あいまいなままに初歩から中級に移行してしまう事が多い。

現在、過去、過去分詞が三要形として記憶させられるために、これらを一つの属性を持ったものとして理解してしまう生徒がいる。

述語動詞を構成し、かつその先頭に定動詞として機能する、現在形、過去形を明確に他と区別し、分詞、動名詞をそれぞれの機能と用法において明確に理解されねばならない。

受動の公式は be p.p. であるが、これが進行形である be ～ing と結合して受動の進行形を形成するならば be being p.p. である。そして先頭の beが定形として am, is, are, was, were と変化するものである事が理解されねばならない。

しかし実際問題としては、生徒は A bridge is being built. といった文を暗誦する事の方が学習上効果的である。

I married her. という文が理解できても、これが複雑な時制となると I am going to be married her. という形になったりする。つねに基本的な形の展開として理解させて行くのが効果的である。

**受動の理解について**

「道が広くなる」「家が出来た」という風に、日本語には普通受動があまり用いられない一方、「雨に降られた」という風な心理的被害を表わす受動が日本語に見られる。そのため、生徒にとって受動の理解はかなり困難なものの一つである。

The house was built は容易に理解されるであろう。しかし I am excited. The game was exciting. やこれに類する表現は、繰り返し指導して行かなければならない。I am interested. The book is interesting. He is an interesting person. といった基本的な概念の徹底的な習熟と関連付けて説明して行くのが効果的であると思われる。

さらに I could not make myself understood in English. I tried to make myself heard. 等の表現になると、生徒の受動の理解の困難さがはっきりと表われて来る。

前者の文を「私の英語が通じなかった」と記憶させるのは便利ではあるが、一方、I could not make myself understood の適切な意味が理解できないのは不十分な指導となろう。

また、準動詞の受動形（他動詞の過去分詞）の使い方、分詞構文における受動態の使い方も生徒の困難を感ずるものに数えられる。これらも基本と関連付けて説明して行く必要がある。

**時制について**

時制が意味する事の理解、各々の時制の意味と用法も、生徒の困難点の一つである。さらに上述したように述語動詞の正しい形を理解運用する困難とも関係して来る。

一般に、日本語の訳文から、過去と現在完了を混同する事、一旦過去完了を学習すると、過去で表現すべき所にも過去完了を多用する事、過去から現在までの継続という概念が理解しにくい事等の困難が見られる。

日本語の訳文による説明は不徹底に終るきらいがあり、このような時制の説明においては、絶えず時の流れを表わす図表を書いて解説する事が、生徒の理解を助ける。

日本語では「～を読みます」と言うが、これは「これから読む意志を持っている」のか「習慣的にいつも読む」のか不明の場合がある。

また生徒には現在形と現在進行形の区別が分らず、進行形で表現すべき所を現在形で表現するという事が多く見られる。これらの異同も、進行形にならない動詞と関連して、絶えず解説を行なわなければならない。

また、教師が動作を以って説明する場合には、I stand up. I go to the door. ではなく I'm standing up. I'm going to the door. と言うべきである。

**接続詞と複文、重文について**

よく見られる誤りとして、He has much experience though he is young を「彼は多くの経験を持っているが…」と訳すのは though を単に「～が」と覚えているという事と同時に、無意識に接続詞を日本語式に前の節の最後にくっつけているのである。

中級になるに従い、文が長くなると、このように節による文の正しい切れ目に無とんちゃくに文を読もうとし、そのために、読解に次第に困難を覚えるようになる生徒がいる。

修飾要素を（　）内に包み、文を単純化する事、接続詞と副詞の機能的な違いを理解し、接続詞や主語、述語動詞を手掛りにして、文章を分析して、構文を正しく把握する習慣を養うよう指導しなければならない。

**仮定法について**

仮定法は生徒が最も困難に感ずるものの一つである。上述のように複文の構文、述語動詞の構成、時制の概念等、生徒の理解の困難なものを含んでいる上に、いろいろ混同したり誤解したりし易い要素を含んでいる。

仮定法の理解の上で何が困難なのか、何が混同、誤解され易い点なのかをよく把握し、それにもとづいて説明して行かなければならない。

1．時制のずれについて　現在の事を言うのに過去形、過去の事を言うのに過去完了形を用いるのは理解しにくい。しかし日本語でも、「もし僕がアメリカ人だったなら」という風に過去形を用いる。ただし、日本語では仮定にいつも過去形が出て来るとは限らず、実現可能な事の表現と、不可能な事の表現の差のはっきりしない事があり、また仮定法過去完了に該当する表現はない。

2．If がついたらすべて仮定法か　生徒には一旦仮定法を学習すると if で始まる文をすべて仮定法だと速断する者が出て来る。そして If it is fine tomorrow, ～という文を仮定法現在、または仮定法未来と速断する者もいる。

3．主節と従続節について　仮定法の文では仮定を表わす文が副詞節である従続節でありその帰結を表わすのが主節である、という概念を明確にする必要がある。そして仮定法過去、仮定法過去完了の両者において、それぞれの節の述語動詞の形態を明確に把握させる必要がある。従続節が後置される場合、さらに混乱を起すことのないように注意する必要がある。

If I could speak French, ～のように従続節に助動詞が出て来ても、これを主節の過去助動詞と混同しないように注意する必要がある。

4．否定の構文について　If I did not know him, ～のように否定の構文がとかくおろそかにされがちである。

主節において、～ I would have not been wounded. のように have not という結合から not の位置の間違いが多く見られる。述語動詞において not はいつでも最初の語（定形）の次に置かれる事をたえず注意する必要がある。

5．should, were to について　should が付く仮定法未来は「万一」という概念、were to は「純粋な仮定」である。しかし、これは主観によって、どちらでもよい場合が出て来る事に留意しなければならない。

6．wish～, as if ～の用い方について　この後に続くのは仮定法の構文における主節の述語動詞であろうか、従続節の述語動詞であろうか。生徒にはこの点に関して不明瞭のままに迷っている者がいる。あくまでも従属節の述語動詞、つまり過去形か、過去完了形が続くのであって、主節の述語動詞つまり、助動詞の過去形＋～の形が来るのでない事を繰り返し解説する必要がある。

この場合にも上記3のように I wish I could speak French. の could speak は can speak の過去形である事に留意させる必要がある。

またどのような場合に wish～, as if ～のあとに過去、どのような時に過去完了が来るのであろうか。これも主節の動詞との同時、もしくは以前という概念でのみ説明しなければならない。生徒はこの同時、以前という概念を、現在、過去といった風に誤解する事によってこの用法の運用が不可能になってしまう。

また wish を常に I wish という風に説明したり、I wish による用例だけを出す事を避けなければならない。wish の主語はいつも I とは限らない。

用例の意味はすべて明確でなければならないが、特に仮定法の用例については、それが明確に仮定的なものである事の分る表現を用いたい。

**準動詞について**

過去と現在とは別個に、不定詞（原形を含む）、分詞、動名詞がある事、それらの準動詞は、述語動詞を構成するのに用いられるものがある一方、それぞれの機能を持っている事を明確にする必要がある。

現在分詞と動名詞の違いをはっきりさせる必要があり、また生徒には現在分詞を進行形と称する者の多い事に注意する必要がある。

またすでに述べたように受動の意味は生徒には特に分りにくいので、準動詞における受動の意味と用法に絶えず留意する必要がある。

**文の理解と把握について**

中級の初期においては上述のような諸点を中心として、基本的事項の理解を進めて行かなければならない。しかし文を読み、その内容を把握するという事に、重点が移行して行かなければならず、そのための指導が重要になってくる。そのための留意点としては、

1．長文全体、もしくは paragraph 全体の意味をとるよう指導すること
最初の分らない単語から辞書で調べるというやり方でなく、先ず辞書なしで意味を把握する努力をして見ること。

2．英文の表現法の展開について　　英文では概して最初に書き手の言わんとする主張を述べ、次にそれを論理的に推し進めて行く書き方をする。偶然性に期待するような読み方をすると、十分に意味を把握できない事になる。

3．構文の把握について　　長い文においては構文を論理的に分析する習慣を養う事。
単語だけを見て適当に訳して行こうとする態度を排すること。

4．辞書について　　未知の単語は前後関係から意味を推測し、しかる後に辞書で調べること。辞書の最初の意義だけにたよらない事。発音は推測しないで、必らず発音記号で確かめること。辞書では、その単語の前後を見て、派生語、関連語を同事に覚える事。

5．多読について　　本校においては英語IIと並んでIIBの指導にも重点を置いているが、英語は非常に難しく、自己の学力とはなはだしい差のあるものを少し読むよりも、やや容易なものを多く、かく出来るだけ速く読みこなす訓練が大切である。現時点においてこの事は出来なくても、そのような方向をめざすべきであろう。

5．単語について　　初歩から中級へかけて、単語の意味の混乱が見られる事が多い。
ある単語について、一番最初に知った語義だけにいつまでもこだわること、辞書の最初の語義だけをあてはめること、文中の前後関係を無視して、先硬な訳語をあてはめること、――このような傾向のために文意を正確に把握できなくなる事が多い。

単語の学習においては、どの程度の数の単語を必要とするか、という事も重要な関心であり高校卒業までには 7,000ぐらいの単語力が必要なのではないかと思われる。

また、和文英訳においては、単語の register（使用域）についての考え方も常に関心を持つように訓練すべきである。

英語科年間指導計画　**英語Ⅰ**　昭和57年度第1学年

| | リーディング (時数) | 文法の補強 (時数) | 副読本による補強 (時数) |
|---|---|---|---|
| 1年<br>1学期 | 5文型 2<br>前置詞句 1<br>不定詞の用法 1<br>動名詞の用法 1<br>分詞の形容詞的用法 1<br>関係代名詞 1<br>過去完了 1<br>継続を表わす現在完了 1<br>関係副詞 1 | 5文型 2<br>名詞、冠詞 1<br>代名詞 1<br>動詞 1<br>助動詞 1<br>形容詞、副詞 1<br>態 1<br>準動詞 2 | 前置詞＋関係代名詞 2<br>関係代名詞 what 2<br>関係副詞 3<br>複合関係詞 2<br>助動詞の用法 3<br>間接疑問文 1<br>動名詞の用法 2<br>進行形未来時制 1<br>使役の have 1<br>関係副詞の継続用法 1 |
| 1年<br>2学期 | 現在完了進行形 2<br>関係代名詞 what 1<br>付帯状況を示す with～ 1<br>助動詞と共に用いられる受動態 2<br>関係副詞 that 1<br>強調構文 1<br>比較級によって表わされる最上級の意味 2<br>文修飾副詞 1<br>節の種類と用法 2 | 準動詞 3<br>句 2<br>接続詞、節 2<br>関係詞 2<br>話法 2 | 接続詞 4<br>完了不定詞 4<br>比喩の表現として使われる同等比較 2<br>語幹の同じ異形の形容詞 2<br>be to do 3<br>過去進行形～when 2<br>get A C（AをCにする） 2<br>動詞＋副詞＝他動詞 2<br>動詞＋前置詞の関係 3<br>目的語（不定詞、動名詞、両方）による動詞の使い方 2 |
| 1年<br>3学期 | 未来完了 1<br>助動詞＋完了不定詞 2<br>過去完了進行形 2<br>It seems that ～ 1 | | 現在分詞の用法 2<br>分詞構文 3<br>語法 3<br>仮定法 4 |

1. 57年度においては、英語Ⅰのリーディングの4時間は同一人によって受け持たれ、そのうち、一時間は、2学期中頃まで、基礎文法の学習にあてられた。（三省堂『Intensive English Grammar, Book 1』）
2. 英語Ⅰの教科書　文英堂『Unicorn English Course 1』は2学期で終了し、3学期からは英語IIの教科書 研究社『The New Age English 2』に移行し、それを58年度第2学年に使用中である。

英語科年間指導計画 **英語II，英語IIA・B・C** 昭和58年度第2学年

| | 英語 II (時数) | 英語 II A (時数) | 英語 II B (時数) | 英語 II C (時数) |
|---|---|---|---|---|
| 2年1学期 | 分詞構文 2<br>仮定法 4<br>話法 2<br>関係詞の継続用法 2 | ◦単文を聞きとる練習、ディクテーション（英作文の基礎として例文の暗記を兼ねる。） 6<br>◦スピーキング練習（生徒に1週間程前から準備させる。） 4 | 不定詞の否定 2<br>副詞節中の現在完了 2<br>仮定法過去完了 4<br>助動詞＋完了不定詞 3<br>強調構文 2<br>関係詞節中の挿入節 2<br>「前置詞＋関係代名詞」の非制限用法 3<br>「副詞＋主語＋動詞」の倒置構文 2 | Part I 導入編<br>Lesson 1 ～ 8<br>文章構造と文型（修飾語句にまどわされないで、自分の書く英文がどの型に当るか掌握させ、発展的に習熟を計る。） 10 |
| 2年2学期 | 前置詞＋関係代名詞 3<br>呼応 2<br>相関接続詞 2 | ◦短いスキットの内容を把握するヒアリング練習（英語による質問応答というスピーキング練習も兼ねる。） 6<br>◦スピーキング練習（授業中に生徒にテーマを与え、10分程後に話をさせる。） 7 | 同族目的語 2<br>as if＋過去完了形 2<br>be to do の用法 3<br>過去進行形の受け身 2<br>分詞構文 4<br>前置詞＋関係代名詞＋to 不定詞 3<br>完了形の不定詞（仮定法 if 節の代用） 3<br>同格の that 節 2<br>never ～ more……の最上級相当表現 2<br>部分否定 3 | Part II 基礎編<br>Lesson 9 ～20<br>語法上の基礎事項の整理と正しい表現の練習（いろいろな時制、助動詞、態、it、準動詞） 13 |
| 2年3学期 | | ◦発音練習 3<br>◦グループ、ディスカッション（英語） 3 | 独立分詞構文 3<br>形容詞＋as ＋主語＋動詞(be) 2<br>二重否定 1<br>have＋目的語＋～ing 2<br>仮定法if節代用のwith 3<br>no matter how…… 1 | Part II 基礎編<br>Lesson21～26<br>語法上の基礎事項の整理と正しい表現の練習（関係詞、前置詞、比較、仮定法） 6 |